

# モンゴル紀行

## 天は蒼蒼

勅勒の川 陰山の下

天は穹廬に似て 四野を籠蓋す

天は蒼蒼 野は茫茫

風吹き草低れて 牛羊を見る

「勅勒歌」は唐の時代、陰山山脈の北麓で遊牧生活を営んでいたトルコ系民族「勅勒」の民謡を、北齊の有名な將軍・斛律金（四八八―五六七）が漢訳したものと伝えられている。「勅勒歌」は私の高校時代の教科書に載っていたが、「天は蒼蒼 野は茫茫」といった日本にはない 茫漠たる景観と、読み下し



文の語呂の良さとでたちまち好きになった。詩の大意は以下のとおりである。

勅勒の草原は陰山山脈の麓によ

こたわり、大空はゲルのように半球状にゆったりと大きく四方の野を覆っている。

空はどこまでも青く、野原は果てしなく広がっている。

風が吹いて草が低くなびくと、平原のあちこちには放牧された牛や羊の姿があらわれる。

首都ウランバートルを一步でも外に出ると、この詩のような茫漠たる景観はいまほとんど変わらない。モンゴルは日本の国土の約四倍もの広大な国土面積を持つが、その国土のほとんどが草地なのである。

二十一世紀の文化はモンゴルにも確かに押し寄せて来てはいる。車やオートバイを所有している遊牧民も多い。多くのゲルには太陽光発電のパネルが設置され、蓄電池に

貯めた電気で夜間の照明とテレビ視聴ぐらいは可能になった。保温ポットやカセットコンロはほとんどのゲルに見られた。

しかしそれにもかかわらず、移動可能な組み立て式住居・ゲルに住み、家畜から得られる毛や乳や肉を生活の糧にして生きているという生活形態は、一千年前もいまも変わらない。

ここで「遊牧民」という言葉について触れておこう。遊牧の「遊」を「遊ぶ」という意味にとって、遊牧民は気の向くまま家畜を追って気軽な暮らしをしている民と勘違いしてはならない。遊牧の「遊」は遊撃手の「遊」と考えるべきだ。遊撃手は二塁〜三塁間の守備はもちろん状況によって三塁や投手のバックアップも行う。守備範囲が広く最も難しい

ポジションといわれている。「遊」は移動するという意味なのである。

国語辞典には、遊牧の解説として「定住せず、牛や羊などの家畜とともに水や草を求めて移動し、家畜を飼養する牧畜形態」とあるが、これも誤解を招きかねない。



モンゴルの移動式住居ゲル

モンゴルの遊牧の場合、夏营地、冬营地など季節によってゲルを営む場所は大まかに決まっており、自由気ままに移動しているわけではない。春夏秋冬の四回、ゲルを移動させる場合もあるし、夏冬の二回しか移動しない場合もある。

最近では移動の回数が減っているという報告もある。いまや遊牧という言葉に代わって移牧という言葉を使った方が良いという学者もいるのである。

## モンゴルの風土と牧畜

今回の旅には、日本語が話せるガイド兼炊事係とロシア製ミニバンを運転する運転手を雇った。泊まる場所は遊牧民たちのゲルである。観光化が進むモンゴルでは、各

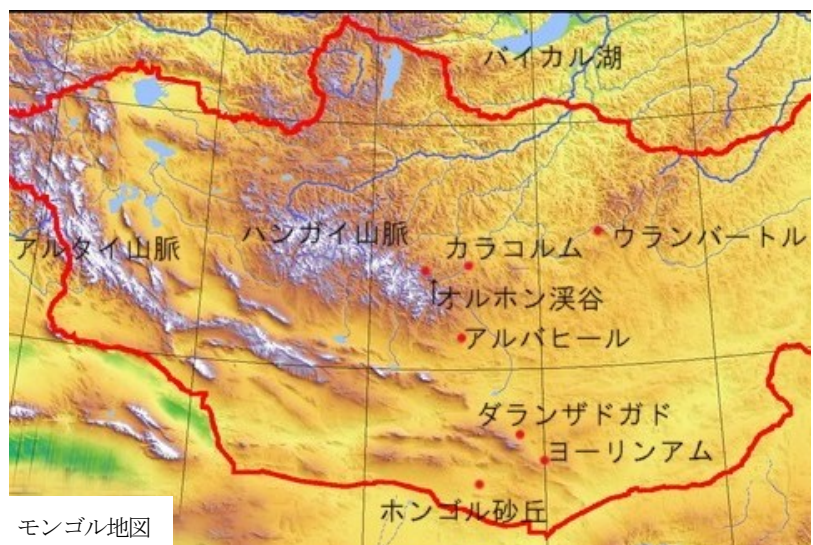
地に観光客専用の宿泊施設が設置されつつある。洋式のトイレやシャワーが完備され、レストランや売店を中心に宿泊用のゲルが円を描くように配置されている。しかしあえてその土地で牧畜を生業としている地元民のゲルに泊まらせてもらうことにしたのは、モンゴルでの牧畜の様子を少しでも身近に観察したかったからである。日本でいえば、農家や漁師が経営する民宿に泊まりながらの旅といったところである。

モンゴルでは、羊、山羊、馬、牛（ヤクを含む）、ラクダを五畜（タブン・ホショー・マル）という。そして生活している土地の乾燥度によって、これらの五畜をうまく飼い分け、主力となる家畜の種類を決めているように見える。すべての家畜飼養頭数は二〇二〇年には七千万頭

（モンゴル国統計年鑑）で、羊四、山羊四、牛と馬がそれぞれ一ぐらいの比率である。ラクダは一パーセントにも満たない。モンゴルの人口が三百四十万人であるから、家畜の数は人口の二十倍もあることになる。

モンゴルは、東側が大興安嶺、西側がアルタイ山脈で仕切られ、北側はハンガイ山脈を経て草原ステップ帯がバイカル湖につながり、南側はゴビ沙漠で中国と接している。緯度でいえば北海道と同じくらいであるが、国土の平均標高が千五百八十メートルと高原で、短い夏は草花が咲き乱れ、避暑地を思わせる爽やかな風が吹き抜ける。

しかし冬は一転して零下二十度や三十度は当たり前という厳しい寒さに襲われる。ウランバートルの



モンゴル地図

一月の平均気温はマイナス二十二度Cで、世界でいちばん寒い首都といわれる。

モンゴルの気候のもう一つの特徴は乾燥である。海から遠いため湿



気が届かず、年間の平均降雨量は三百ミリ程度しかない。湿気はもっぱら北の北氷洋からの低気圧によるものだ。したがって北側が割合乾燥が緩やかで針葉樹林帯が広がるのに対し、南側はゴビ沙漠となって乾燥が激しい。

家畜の中でいちばん乾燥に強いのがラクダ、次に山羊や羊で、牛はもつとも乾燥に弱い。馬は南ゴビ沙漠の乾燥地帯から、中部の草原や北部の針葉樹林帯まで幅広く分布している。これは馬が乗り物として重要な役目を果たしているからであろう。また馬の所有は富や権力の象徴としての意味も持っている。

今回の旅で一番頻繁に見られ、また興味を引いたのが家畜の乳搾りである。モンゴルでは、乳製品のことを「白い食べ物」という。これに

対し「赤い食べ物」とは、肉料理を意味する。乳の出の多い夏は白い食べ物の季節だ。遊牧民たちは生乳を飲まない。搾った乳は加熱、攪拌、静置、分離、濾過、発酵、成型、乾燥などさまざまなプロセスを通じて加工され、六十種類とも言われるほど多くの乳製品になる。代表的なもので、私も旅の最中に何回もご馳走になった乳製品をあげれば、クリーム状のウルクムや固形状のアーロール、飲料のアイラグ(馬乳酒)などがある。

乳製品の加工の過程はじっくり腰を落ち着けて観察する機会がなかったが、搾乳の作業にはたびたび出くわした。家畜の種類によって、少しずつ搾乳の仕方や乳の利用方法が変わっていることに大きな興味を覚えた。

何気なく行っている搾乳や乳製品作りが、遊牧民としての長い歴史に裏打ちされた高度な牧畜技術の一環であることに気付き、家畜を追ってのんびりと人生を送るといった遊牧民に対する単純な私の先



わだちのような道路。これでも主要幹線道路だ。

入観、あこがれ感は大幅に修正されることになったのである。

## 羊の乳搾り

まず車は、ウランバートルからゴビ沙漠を目指して南下した。一九九五年製のおんぼろロシア製ミニバンは、日本の林道の方がよっぽどましというほどの悪路をものともせず、砂煙を巻き起こしながらよく走り続けた。

故障がない訳ではない。エンジンがかからないことも、アクセルを踏み込んでも一向に速度が増さないことも、ギアの変換のたびにガウガウと変な音が続くこともあった。

しかし運転手が運転席の下にあるエンジンルームや車体の下を覗き込み、部品をはずしたり、スパナを振り回したりしているうちに直っ



古いが頑丈なロシア製ミニバン

てしまうから感心する。工具や修理部品もひと通りそろっている。私は車を買って以来、一度も自分でボンネットを開けたことがないぐらだから、とてもこんな車は怖くて運転できない。現在の日本の車は大量の電子部品が使われているが、ロシアが軍用に作った車だというから、戦場でもすぐに修理可能なように、単純かつ頑丈に作ってあるの

だろう。

モンゴルの道路についてもひと言触れておきたい。モンゴルの道路地図を見ると、首都ウランバートルから南南西に、ドンドゴビ県の県都マングルゴビを通り、ウムヌゴビ県の県都ダランザドガドまで一本の道路が太い線で示されている。地図で見ると限り主要幹線道路だ。

しかし走ってみて分かったことだが、日本の常識では、これは道路とは呼ばない。あえて呼ぶとすればわだちである。草原上の同じところを車が何回も走ることによって草が擦り切れ、平行な二本の線のような地肌が現れる。車はその跡をたどって走っているに過ぎない。

大きな布を波打たせたようにゆるやかにうねる草原地帯はどこでも走ろうと思えば走れる。しかし



沙漠性草原の羊の群れ・ドンドゴビ周辺

草原の草を守るために、すでに車が走った後を繰り返し走るのがモンゴルの草原を車で走るマナーである。無秩序に草原を車が走れば、草原は荒れ、やがては遊牧民が家畜を養うことを困難にしてしまうからだ。

前置きはこのぐらいにして、まず

はドンドゴビ県の県都・マンダルゴビの五十キロほど手前で出会った羊の乳搾りの話をしよう。ウランバートルから南に三百キロほどの場所である。

周囲は背の低いイネ科やニラ科の草がまばらに生える、ステップと沙漠の中間のような平原である。標高は約一千五百メートルで、西の方にはバガ・ギャザリンという標高一七六八メートルの岩山が草原を区切っている。時刻は午後七時少し過ぎだが、七月のモンゴルの空はまだ明るい。

車から眺めると、二人の男性が放牧中の羊を追い回して一か所に集めようとしている。女性はバケツを持って羊の群れに向かって行くところだ。乳搾りに違いない。遠くの方にゲルも見える。

早速車を止め、ガイドのエギーを伴って見物に向かった。エギーはモンゴル文化教育大学の四年生。得意の日本語を生かして、夏休みのアルバイトに、私の旅のガイドを務めることになった。バイト代は一日約千円である。

モンゴルの「こんにちは」は「サンバイノー」という。「三杯飲ゝむ」といった調子で発音すれば十分通じる。まずは笑顔で片手をかざしながら、主らしきピンクのシャツのおやじに「サンバイノー」と声をかけると、「オオ、サンバイノー」とすぐに愛想良い返事が返ってきた。

「どこから来た」  
「日本です。ちょっと作業を見学させてください」

「ああ、いいよ。日本のツナミは怖いな。ゲンパツはどうなった。あんだ、



首をロープで括り、向い合わせに整列させる

モンゴルに逃げてきたのかい」  
「ご心配かけましたが少し落ち着いたところですよ」

大平原に孤立して暮らしているように見える遊牧民も、最近はやや半分ほどのソーラーパネルで起こし

た電気を蓄電池にため、夜にはテ羊のレビを見る時代である。

ピンクシャツのおやじが最初に始めたのは、一本の長いロープを羊の首に巻きつけ、交互に向かい合わせになるように整列させることである。ロープは結び目を造ることもなく、ただ向かい合った羊の首を交互に巻いているだけだが、これで羊は暴れることもなく、おとなしく乳を搾られるのを待っている。

私だったら一頭の羊を捕まえるにも苦労するに違いないのだが、二十頭ほどの羊をいとも簡単に整列させてしまった技はただ事ではない。

「親父さん、これだけ従順になるように飼いならすとは見事なもんですね。小学生の子供を整列させるのだってもっと手間がかかりますよ。」

ところで、どれが乳を出すやつで、どれが乳を出さないやつだか、見てください分かるんですか」

「ここにいるのはみんな乳が出るさ」「ええ！そうするとここにいるやつはみんな子供を産んだやつですか」「そうだよ、春に子供を産んで、八月ぐらいまでは乳が出る」

ピンクシャツのおやじは、そんなことは当たり前だろうという顔で、黙々と作業を進める。しかし私にはちよっと見には、どれがオスでどれがメスかまるで見当がつかない。

モンゴルでは種羊だけを残してオスの仔羊はみんな殺して食べてしまおうといったヨーロッパ方式とは若干違って、オスも去勢したのち生かしておくらしい。雄羊を肉として売却する市場が近くにないし、冷蔵庫もない。草がある程度十分あれ



ば生かしておいて、食べるときに殺した方が都合がよいのだ。

雄羊の子供は売られたり食べられたりして徐々に数を減らして行き、最終的には種付け用の雄羊だけが残ることになる。だからこの時期に成体の羊は、たいがい乳を出す雌羊ということになる。

私もオスの一翼を担うものとして、この事態には深く考えさせられる。子を産むこともなく、乳も出さないオスをいつまでも飼っている理由はない。牧畜を生業としているからには、そんな無駄な事をするわけがないとは知りつつも、哀れなオスに一抹の寂しさと同情を禁じ得ないのであった。

多くの羊から一斉に乳を搾るためには、去勢やら種付けやらも一斉にしなければならぬ。ピンクシ

ヤツの話では毎年秋が種付けの季節で、約五カ月すると子供が生まれるという。出産期のばらつきによって、搾乳可能な羊とそうでない羊が混在していたのでは、搾乳という仕事をやっかいにするだけだ。

どうやって種付けをするのかは聞き洩らしたが、去勢も含めて生殖の管理を緻密にやらなければ牧畜という生産形態は成り立たないことが想像できる。

乳搾りはもっぱら女性の仕事のようなのだ。三人の若い女性が、二列につながれた羊の後ろに回り、後肢の後ろにバケツを置いて搾っている。後肢の間から手を入れ、乳房全体を軽くつまむようにして搾る。

一頭の羊から取れる乳はそんなに多くない。せいぜい百cc程度だろう。一頭を絞り終わるのに二分程

度かかるので、百頭を搾るのには三時間ぐらいかかる計算になる。中腰の作業なので大変だ。三人の女性はピンクシャツの二人の息子の嫁と里帰りしている自分の娘だという。



乳搾りは女性の仕事だ



ピンクシャツの奥さんは孫を抱いているだけで、乳絞りに参加しなかった。

乳を搾り終わった羊は、ピンクシャツがロープを緩めると、ロープからするりと抜け出して、一目散に牧草をはんでいる仲間のところに駆け出した。仔羊はゲルの近くの囲いの中に集めてあるとのことである。

「親父さん、お宅では羊は何頭飼っているんですか」

「たくさんいるよ」

エギーが間に入って通訳するのだが、日本語が未熟のために、ときどきいい加減な通訳をする。

「たくさんいることは見ればすぐ分かる。何頭ぐらいか、もう少し細かく聞いてみてくれ」

エギーはピンクシャツの親父に向かって、再び何やら話しかけている。

エギーは私の方に向き直ると、「五畜を揃って持っている。十分だ」としか言いませんよと困ったような顔をする。

最初はこのおやじ自体が正確な数を把握していないのかと思ったが、遊牧民にとって家畜が一番重要な財産のはずだし、そんなことはあるまいと考えながら、ふと思いついた。家畜が彼らの全財産であれば、行きずりの者に正確に答えるわけがない。私が預金通帳の残高を聞かれたら、家族にも教えないのと同じことだ。

ちなみに羊一頭の値段は、日本円で五千円から六千円程度だという。ざっと見渡したところ所有している数は三百頭は下らない。山羊は羊の二倍ぐらいいるといふから、遊牧民としてはまずまず裕福の方か

もしれない。

ピンクシャツは乳絞りが終わったらゲルに寄ってお茶を飲んで行くと盛んに勧めるが、運転手が今日の宿泊地までまだ遠い、早く行かないと暗くなるとせかすので、残念ながら誘いを丁重に断り、先を急ぐことにした

### ラクダの乳搾り

車はドンドゴビ県からさらに南下し、ウムヌゴビ県に入る。ウムヌゴビ県はモンゴルで最も広いのだが最も人口が少なく、北海道の二倍の面積に四〇五万人しか住んでいないという人口密度の低い県である。モンゴルの僻地といってよい。

ウランバートルから約六百キロ南で、ロシア製ミニバンで三日の行程で



炎の断崖

たどり着いた。ここはもはやゴビ沙漠の一角で、日中は三十度を超えるほど暑く、乾燥度が高い。年間の平均湿度が三十パーセントというから、日本では乾燥注意報が出っ放しということになる。草の付き方も

疎らになり、砂礫交じりの地肌が見える。

最初に目指したのがゴビ沙漠中の名所の一つバヤンザグ。ザグの木が豊かな場所という意味だそうだが、木など育ちそうもない沙漠の一角に、松のような葉の細い木が根をおろしている。

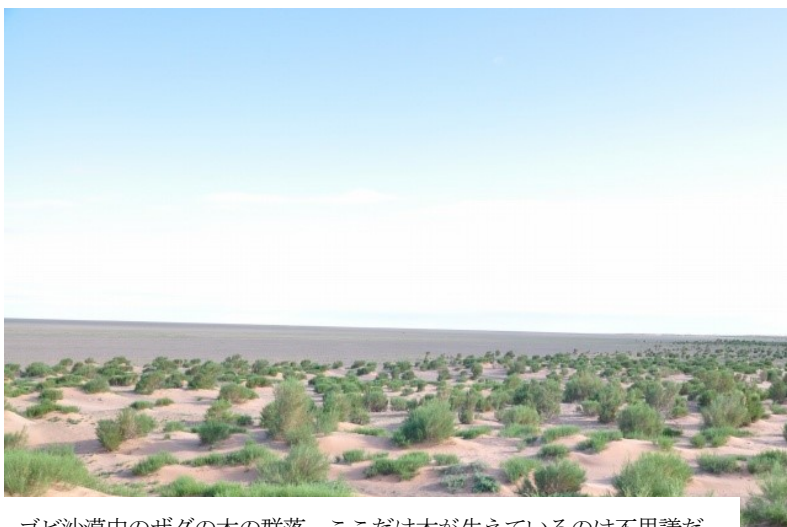
この近くには「炎の断崖」と呼ばれる名所もある。赤茶けた砂岩と空の青の対比が美しい。ここは世界で初めて恐竜の骨やたまごが発見された場所としても有名である。

恐竜は大きな体を維持するため、大量の草を必要としたはずだ。いまは砂礫しかないこの沙漠が二億年前には豊かな緑に覆われていたとはにわかに信じがたい。

乾燥が増し、草が少なくなるのと逆比例してラクダの姿を見るこ

とが多くなった。地表を流れる水はどこにもなく、水位の高い場所に掘った井戸が頼りだ。井戸から汲み上げた水を家畜も人間も利用するしかない。

ラクダは、羊や山羊と違って、



ゴビ沙漠中のザグの木の群落。ここだけ木が生えているのは不思議だ

ほとんどが放し飼い状態である。自由放任で遊牧民はほとんど手をかけないように見える。車を走らせていると、遠くに数匹のラクダの群れがのんびりと草を食んでいるのを見かけるが、周囲にゲルや人影はほとんどない。最初は野性のラクダかと思ったが、エギーはそんなことはあり得ない、必ず持ち主がいるという。

ラクダを飼っている遊牧民に事情を聞いてみて分かった。彼らは産まれた仔ラクダをゲルの近くに止め置くことによって母ラクダをコントロールしているのだ。

ラクダの乳搾りをしているお姉さんに聞いたところ、出産後のお母さんラクダは遠くまで草を食べに出かけていても、乳房が張ると、朝夕二回、仔ラクダに乳を吸い出し

てもらったために帰ってくるのだそうだ。

お姉さんの言葉通り、遠くの方で草を食んでいた母さんラクダたちが、ゆっくりとゲルの方に向かって帰り始めたのが午後八時二十分ぐらいである。

ラクダ語は理解しかねるので正確には分からないが、お母さんは「乳が張って痛いよ、早く飲んでおくれ」と鳴きながら仔ラクダに近づき、ゲルの近くにロープでつながれていた仔ラクダは「お腹がすいたよ。ミルクが飲みたいよ」とお互いに鳴き交わしているようだ。

仔ラクダはロープにつながれているので、お母さんの方から子供の近くに寄って行く。仔ラクダはすぐに母親の乳房に食らい付き、頭で母の乳房を突き上げ、突き上げミルク



ラクダの群れ。遠く地平線にも何頭が見える

を飲む。こうすると乳がよく出るようになるようだ。

そこに乳搾りのお姉さんの登場である。お姉さんはまず母親の後肢をひもで縛ってしまう。乳搾り中に脚で蹴飛ばされないための用心なのだ。

乳搾りは、お母さんラクダの左



後肢の脇に立つて行う。自分の左足のひざを曲げた上に、ポリバケツを乗せ、ラクダの腹に押し付けるようにして固定し、両手でラクダの乳房をしごく。

一頭の乳搾りに要する時間は五分程度。乳の出が悪くなると次のラクダに移る。一頭から取れる乳は二百cc程度だ。この間、仔ラクダには右側の乳房を吸わせたままである。

ミルクを与え終わったお母さんラクダは餌を求めて再び草原に戻って行った。ラクダは羊や山羊などと違って乳を出す期間が長く、冬の間も乳が搾れる利点がある。長いものだと一年半の間、乳を出し続けるという。乳は蛋白質や脂肪が多く、ラクダ乳酒を含め様々な乳製品に加工される。



ラクダの乳搾りは仔ラクダと一緒に

ラクダの飼育頭数は最近では減少傾向にあるという。市場経済化で経済的価値の高い山羊や羊が増えたことや、車やオートバイの普及で荷物運搬用としての役割が低下してきたことなどが原因だという。世界で飼育されているラクダはほとんどがヒトコブラクダで約二千

五百万頭。これに対し、寒い沙漠に適応したフタコブラクダは中央アジアからモンゴルにかけて数十万頭しかない。そのうちの約半分がモンゴルで飼育されている。

ラクダは他の家畜が食べない草も食べるし、水を与えなければならぬ間隔が長いので、水場から遠く離れた場所でも放牧が可能である。

旱魃で他の家畜が死んでもラクダは生き延びられる。厳しい乾燥環境で肉や乳を提供してくれるヒトコブラクダの行く末が気になるところである。

## ゴビ沙漠の名所

ラクダの乳搾りの話を長々と書いてきたが、せっかくゴビ沙漠まで

足を延ばしたのだから、いくつかの名所も簡単に紹介しておこう。世界で初めて恐竜の骨が見つかったバヤンザグはすでに紹介した。残るはヨーリンアム渓谷とホンゴル砂丘である。ゴビ沙漠の中でこの二つの場所はまったく異なった景観を示す。

ヨーリンアム渓谷はゴビ沙漠の中に突き出すように東西に横たわるガルバン・サイハン山脈の東の端にある渓谷である。渓谷といっても日本でいえば小川程度の流れしかないのだが、ゴビ沙漠の中にあつてはオアシスのように水に恵まれた場所である。当然、周辺に比べて草の密度も高くみずみずしい。

渓谷の中は自然保護地区に指定されていて、家畜の放牧が禁止されているので、たくさんの花が咲き乱れ、野生動物や鳥の姿を見かける

ことも多い。

両側が高い断崖にさえぎられた細い谷の奥にはまだ氷塊が残っていた。最初は雪溪かと思つたが、手で触れてみると硬く、雪ではない。年



小川が流れ、高山植物が咲き乱れるヨーリンアム渓谷

間降水量が百ミリ程度のゴビ沙漠で雪溪ができるほど雪が積もると思われぬ。冬の寒さで流れが凍りついたものが、そのまま残っているのだらうと推測した。

私の持っている高度計で、この渓谷は標高二千三百メートル。両側が高い崖で一日中、陽が射すこともないので、氷室のような状態で氷が残るのである。氷の塊は適当な大きさに砕いてポリ袋に詰め、エギルに持ち帰らせた。もちろんビールを冷やすためである。

山肌から湧き出した水や、氷が徐々に融けたものが水源となり、夏でも流れは途切れることはない。渓谷の水がゆるやかに傾斜する扇状地に達するところには伏流水となつてしまふ、地表では涸れ川となつてしまふが、渓谷の水は間違ひなく



ヨーリンアムでの牛の放牧

ふもとを豊かに潤している。

自然保護地区から外に出たあたりでも、草の密度は高く、ゴビ沙漠では珍しい牛の放牧がここでは見られる。乾燥に一番弱い牛が飼える条件を満たすだけの草と水がこ

こでは得られるのだ。

もう一つの名所はホンゴル砂丘。ゴビ沙漠で最大の砂丘であり、横幅が十二キロ、長さが約百キロという。この大量の砂がどこから集まって来たものかよく分からないが、ゴビ沙漠はかつて海の底であったことが分かっているので、海岸の砂浜の砂がこの砂丘を形作る素になったのかもしれない。

ホンゴル砂丘のある場所は、二つの山脈に挟まれた盆地のような場所である。強い北風が常に吹くことにより、周囲の砂が次第に低いところに集まって形成されたものである。一定の方向から風が吹かないと東西百キロにもわたる長細い砂丘は形成されない。

砂丘は高さが二百メートルほどあるのだが、足もとの砂がずるずる



ゴビ沙漠最大のホンゴル砂丘

と崩れてくるので登るのは容易ではない。歩くたびに砂が「キュッ」と鳴ることから「鳴き砂の砂丘」という



異名も持っており、粒子がそろったきれいな砂の集積である。

たおやかな曲線を描く砂丘の稜線まで登ると、素晴らしい展望が開ける。なめらかな布が緩やかに波打つように砂の堆積が続いている。砂丘のふもとには川が流れており、川が作り出す緑の帯と砂丘の対比が美しい。

名所というわけではないが、ゴビ沙漠でもう一つ印象に残る場所があった。農場である。延々と続く砂礫の原を、砂埃を立てながら車を走らせていると、突如前方に濃い緑の塊が見えてきた。近づいてみると意外なことに野菜畑が広がっている。ゴビ沙漠の真ん中で野菜作りとは驚いた。畑の土はからからに乾いていて水気はまったくない。こんなところで野菜が緑豊かに良くも育つも



ゴビ沙漠の野菜畑。周囲は完全な沙漠だ

のだ。

畑は一見して後樂園球場ぐらいの広さがありそうだ。何軒かの農家で共同して野菜作りをしているらしい。畑のあちこちで農作業をしている人の姿が見える。すぐ近く

で草取りに余念がない農家のおばさんに話を聞いてみた。

「おばさん、水はどうしているんですか。近くに井戸でもあるんですか」

「川から流れてくるよ」

「ええ！川なんかどこにもないじゃないですか」

「そのうちに流れてくる。もうそろそろ来るころだ」

「本当かなあ、エギー、川はどこにあるか聞いてくれ。一緒に見に行こう」

広い農園を横切って、おばさんの指さす方にしばらく歩くと、農園の縁に確かに小さな水路があり、両側が緑の草に覆われているし、水路の底は湿り気を帯びている。

水路をさかのぼるように数百メートルたどると、上流から水が流

れてくるのが認められた。水路は一筋の緑の線を描いたようにまっすぐ沙漠の中に伸びている。これは水源までたどり着くには容易なことではないとあきらめ、元の畑に戻ることにした。

「おばさん、水は確かにすぐそこまで流れてきているよ。ここに植わっているのはジャガイモでしょ。ほかにどんな野菜を作っているの？」

「あそこにネギがあるだろう。玉ねぎはもう収穫したよ。キャベツやトマトもあるし、スイカやかぼちゃはもう少しで収穫できる」

「収穫した野菜はどうするんですか」

「ウランバートルに売るんだよ、トラックも持っているから市場へ持ってゆくのさ。中国の野菜は安いけど農薬がいっぱいだからね。あんなものを



灌漑用の水路が沙漠の向こうからから畑まで続いている

食べていたらすぐ病気になるよ。ここは周りが沙漠で、虫がないのさ。だから農薬を使う必要がないのさ。だから評判がいい。草取りが一番大変な仕事だよ」

おばさんは草取りの手を休めて

熱心に説明してくれた。私も水呑み百姓の出身なので、草取りの大変さはよく分かる。水があれば雑草とて伸びない理屈はない。農業とは雑草との戦いだ、死んだ親父がよかったです。

モンゴルに来て痛感したことは、手つかずのまま放置されている大平原が何かに利用できないかということである。大平原に麦でも作ったら世界の食糧事情は一挙に好転するのに、などと真剣に考えていた。

土と太陽と水があれば作物は育つ。平均気温も六く九月は三十度近くなる。問題は水なのだ。モンゴルの大平原に麦の穂がはてしなく緩やかに波打つ光景は夢のまた夢であろうか。

## 遊牧中原を目指して

モンゴルの一番南にあるゴビ沙漠を五日間にわたり駆け回った後、車は一転して北に進路を向けた。



農場を後にして北を目指す

目指すのはモンゴルの中部、オルホン渓谷一帯である。

北氷洋さらにはシベリアからの水分を含んだ北風が、モンゴル中部に東西に横たわるハンガイ山脈で堰き止められるため、この山脈の北側は雨の少ないモンゴルでも比較的降雨量が多く肥沃な土地として知られている。南、北ハンガイ県にまたがるオルホン渓谷はハンガイ山脈を水源とするオルホン川の豊かな水で潤され、モンゴルでも最も美しく豊かな自然が残る場所である。県名のハンガイの意味はモンゴル語で、「自然に恵まれた土地」という意味である。

流域一帯は豊かな牧草に恵まれているため、モンゴル高原の統一を達成した遊牧勢力の多くが本拠地とした。一帯には突厥時代、ウイグ



108の仏塔を持つエルデニ・ゾー寺院の外壁



ル時代からモンゴル時代にかけて長い遊牧民の歴史遺産が散在しており、その美しい自然景観と相まって二〇〇四年にユネスコにより世界遺産に指定されている。

数多くの遺跡の中で私が訪れたのは、カラコルムである。カラコルムは現在、ハラホリンと呼ばれており、十年ほど前までは人口二千人程度の小さな町だったが、カラコルム遺跡が世界遺産に選ばれたため、観光客目当ての人間が流れ込み、いまや人口は十倍ちかくにも膨れ上がったという。

カラコルムはかつてのモンゴル帝国の首都である。有史以前から数千年、この自然に恵まれた土地をめぐって、いくたびもの抗争が繰り返されてきたが、チンギス・ハーン率いるモンゴル民族により、この土地が

統一されたのは十一世紀の初めのことであった。

チンギス・ハーン西征の兵站基地であったカラコルムは、一二三五年に第二代皇帝オゴデイ・ハーンによりモンゴル帝国の首都に定められた。町は駅伝で各地と結ばれ、東西交易の中心として繁栄した。第五代フビライ・ハーンが現在の北京に遷都した後もモンゴル高原の拠点として重要視された。また明による北伐を受け、モンゴル族が北方に追われた十四世紀後半には北元の首都となった。

しかしオゴデイ・ハーンの宮殿を初め、この時代の建造物は全く残っておらず、わずかにその礎石に往時をしのぶばかりである。十九世紀には、町の位置も定かではなくなっており、伝説の都市だったのだが、遺



再建された寺院群。修行中の僧侶もいる

跡群は二十世紀半ばに発掘され、いまやモンゴル一の観光地として整備されつつある。

現在カラコルムで目にするのできる建造物は、モンゴルの主要部

族ハルハ族の初の部族長アダイハーンがダライラマ三世に拝謁して、一五八六年に設立したエルデニ・ゾーという仏教寺院のみである。十三世紀に造られた第二代皇帝オゴデイハーンの宮殿に使われていた礎石などを使用して多くの寺が建設されたため、オゴデイの宮殿は見る影もなく破壊されてしまった。

羊や牛の群れがのんびりと草を食む草原の真ただ中に寺はある。モンゴルでは珍しい大雨が降った翌朝だったので、寺の白壁と緑の平原がいつそう美しい。四方を百八の仏塔を持つ白い壁で囲まれた広大な寺域には、再建されたいくつかの寺院が薨を並べている。

オルホン遺跡の中でもう一つ興味を引くのがオルホン碑文。六世紀半ばに中央アジアを統一した突

厥が自らの文字で自らの言葉を記した石碑で、オルホン川流域一帯で発見されたのでこの名前がある。代表的なものにカラコルムの北東六十キロにある石碑があげられる。

『甘い言葉や柔らかい絹に惑わされず、この地で遊牧を続けよ』と子孫への警句が書かれている(民族の世界史4 中央ユーラシアの世界 護雅夫・岡田英弘著)。この言葉通り、遊牧民たちは今も固定式の家



オルホン碑文

屋に住むよりゲルに住むことを好んでいるようだ。

さて、カラコルムからオルホン溪谷をさらに遡ると、川幅は両側か



オルホン溪谷上流部を目指して

ら迫る山々によって狭められ、ようやく渓谷の趣を増してくる。カラコルム辺りは、日本人の感覚でいうと平原をゆるやかに蛇行しながら流れているように見えてあまり渓谷という感じはしないのだ。

草の密度も背丈も増してくるにつれ、次第に牛や馬の影も濃くなってきた。目指すのはオルホン渓谷の上流部にあるウラーン・ツタガラシ滝（オルホン滝）である。滝はハンガイ山脈国立公園の中にあり、四輪駆動の車しか走れない悪路をカラコルムから西に約五十キロの距離である。ハンガイ山脈の中に踏み込んだのか車は、二本のわだちがわずかに残る急な山道を何度も上り下りしながら進む。

山道の両側には色とりどりの草花が咲き誇り、鳥が舞う。山の北



オルホン川上流部

側の斜面には針葉樹の林が現れてくるのもゴビ沙漠にはなかった光景である。いままでのゴビ砂漠周辺が、「極度に乾燥して比較的温暖」な気候とすれば、モンゴル中部のハンガイ山脈の北は「比較的湿潤で冷涼」と

表現することができ。まさに馬の飼育に一番適した土地なのである。

文化人類学者でモンゴルの遊牧民の暮らしを精力的に研究してきた小長谷有紀（国立民族学博物館教授）も、カラコルムを中心としたオルホン渓谷一帯を『遊牧中原』と名付け、馬や牛の放牧に一番適した土地とみなしている。

（地図で読むモンゴル・季刊民族学）

## 馬と遊牧民

馬はモンゴル人にとって単なる生活の糧ではない。かつて騎馬民族と呼ばれた彼らは、馬を駆って大陸を縦横無尽に行き来し、戦い、一





馬による羊の管理。テルヒン・ツァガン湖にて

時は世界の半分をその支配下に置いたのである。馬がなければこのような覇業が成し遂げられるはずがない。現在のモンゴルの遊牧民にとっ

ても馬は大切な財産であると同時に勇気の象徴であり楽しき友であり、誇りであり安らぎなのである。

遊牧民は馬の背なかで育つといわれるが、首の骨が据わるともう親の背に追われて馬に乗る。小学校へ入学する前の五く六歳になるころには、もう立派に馬を乗りこなしている。馬に乗ることは、遊牧民として生きてゆくための出発点なのである。

草原を車で走っていると、馬に乗って羊や山羊の群れを追っている遊牧民にたびたび出くわす。騎馬で羊や山羊を管理することは紀元前千年頃にはすでに始まっていて、その様子は草原地帯に残る岩画などから推測されるという。

馬で羊を追っていた若い遊牧民に



草の多いところまで羊を追って行く

話を聞いてみた。

「一日どのくらいの距離を移動しているんですか」

「羊は動きがのろいんだよ。放ってお

くと同じ所でいつまでも草を食べているから、良い草があるとこまで追って行く必要があるんだよ。今年は雨がなくて草の育ちがいいからそんなに遠出する必要もないし楽だけど、草の少ない年は遠くまで追ってゆくこともある」

「朝からずーと見張っているの」

「いや、朝早く適当なところまで追ってきて、あとは家に帰って別な仕事をしているよ。帰らないと女房に怒られる」

「家に帰っている間に、羊がどこかへ行ってしまうことはないんですか」

「最初に放した場所の地形やその日の風向きで、どの辺に移動しているか分からないと一人前とはいえないよ」

「ここは広々としていて、あなた達の羊の他に姿は見えないけど、縄張

りはあるんですか。他の人が羊を連れて入ってきたら、喧嘩になりませんかね」

「みんなそれぞれ草を食べさせる場所を持っているから喧嘩なんかしないよ。それにここら辺にいるのはみんなうちの仲間だよ」

シオンホルという青年は、私が渡



草原で出会った遊牧民シオンホル

したたばこを左手でうまそうに吸いながら、右手を大きく振りまわし、平原すべてを抱え込むような勢いだ。モンゴルの法律では住宅地は私有が認められているが牧草地は国有財産である。牧草地が私有化され細切れになったら、遊牧は成り立たない。

「最近はおートバイもよく見かけますけど、欲しくはないですか」

「オートバイはガソリンがないと走らない。馬は草があればどこまでも走るよ。それにオートバイは壊れたら修理できないよ」

シオンホルが一人で馬に乗り始めたのは四歳頃だという。小学校へは一時間ぐらいかけて馬で通ったという。シオンホルは再び馬にまたがると、勢いよく羊の群れの方に駆けていった。

馬による羊の管理は、徒歩によるものに比べて格段に大きな規模の群れを管理できることは間違いない。

モンゴルの馬の飼育頭数は二〇二〇年度の統計で約四百万頭となっている。馬の頭数でいえば世界第六位（FAO統計）だが、人口一人当たりの馬の頭数では圧倒的な第一位なのである。オートバイや車は、約半数の遊牧民が所有しているという統計もあるが、馬への愛着は捨てがたいものがあるようだ。

## 馬の乳搾り

ハンガイ山脈を横断中に、遊牧民のゲルで昼食を「こちそう」になった。ゲルは尾根と尾根の間の谷間に位置しており、豊かな草に恵まれた

場所で、近くには小川も流れている。

ここにはバートリンという一族、三世帯の五つのゲルがある。まず年寄り夫婦用のゲルが一つ、その二人の息子夫婦と子供用のゲルがそれぞれ二つずつである。彼らは突然訪れた私の昼食を快く引き受けてくれた。

私の食事の世話をしてくれるのは上の息子の嫁でムンフツエツェグさん。モンゴルの女性は歳を聞いても答えないことが多いが、四十歳くらいであろうか。

エギーによれば、ムンフツエツェグというのは「永遠の花」という意味で、エーデルワイスのことだそうである。

下の息子の嫁さんも来たので名前を聞いたところ、こちらはナラン

ツエツェグさんで、「太陽の花」、すなわちヒマワリだそうだ。顔がよく似ているので聞いてみると、二人は姉妹。つまり姉は長男に、妹は二男に嫁いだわけだ。





食事を作るといってもストーブの火をおこすところから始めるからしばらく時間がかかるという。食事の準備の前に馬の乳を搾らなければならぬというので、早速見学



パートリン一家の羊の群れ

させてもらった。馬は毎日、二時間おきぐらいに六〜八回乳を搾らないとならないので忙しい。馬の乳はすぐにたまって自然に排泄されてしまうそうだ。

羊や山羊は朝、放牧に出したら暗くなる前に必ずゲルの近くまで連れて帰る。それに比べ、馬は騎乗用などを除いて、夜を含め一日中放っておかれる。しかしお母さん馬は、ゲルの近くに止めおかれた仔馬のことが心配で、放牧に出してもあまり遠くへ行かないのだそう。これはラクダも同じだ。

乳を搾るお母さん馬はナランツェツェグの旦那がすでにゲルの近くまで連れてきていた。旦那は柵の中の仔馬を一頭だけ連れ出し、お母さんのところへ連れてゆく。仔馬に母親の乳を吸わせることでお母さん



馬の搾乳は仔馬に乳を吸わせてから

馬を安心させ乳腺を開き、乳を搾りやすくするのだ。少し仔馬に乳を吸わせたところで、仔馬を脇に退け、ナランツェツェグが乳を搾り始めた。乳絞りの最中は、仔馬は母親の前に立たせたままであるが、



乳は飲ませない。

このやり方はラクダの乳絞りとはほぼ同じだが、ラクダの場合は仔ラクダに乳房を含ませたままであった。また一日に搾る回数や人間が仔馬を母親のところまで誘導することなどが違っている。

いずれにしても「催乳」と呼ばれる方法を用いて、人間が家畜をだましながら乳を横取りしているわけである。馬の轡（くつわ）を握っているナランツェツェグの旦那さんに聞いてみた。

「ここはおいしいそうな草がたくさんあって良い場所ですね。峠を下ってくるときに中腹で小さな木造の小屋がありましたか、あれはお宅のものですか」

エギーが、私たちがやって来た方向を身振り以示しながら話しかけ



おばあさんによるゲルの大掃除。天井の梁を洗っていた。左はフェルトの屋根

る。

「あれはうちの冬営地の小屋だよ。冬の間、全部ではないけど家畜を入れておくのに使っている」

「あの辺はここと比べると草の丈が高くて、花もたくさん咲いていま

したけれど、ここら辺は花がない。

家畜が食べてしまったのかな」

「花が咲き始める前からここにいないからね。あつちは冬のために残してある。だから夏の間は羊も山羊も入れない」

「冬は雪が積もりますか」

「寒いけど、雪はそんなに積もらないよ。十センチぐらいかな」

モンゴルでの家畜の飼い方は基本的には冬も放牧である。家畜は雪を掻き分け、その下にある草を食べる力がないと生きてゆけない。モンゴルでは十年ほど前の雪害（ソド）によって多くの家畜が死に、日本でも大きく報道された。冬のための牧草の確保は遊牧民にとって大きな課題なのであろう。

「馬は何頭いるんですか。仔馬はここに二頭ですよね」

「メスは四頭、種馬が一頭、去勢馬が五頭いるよ」

「乗る馬は決めているんですか」

「去勢した馬を使う。長く乗ると馬だって疲れるから、時々交換するんだよ」

「お母さん馬は仔馬が心配で遠くに行かないと奥さんにお聞きしましたけど、牡馬はどうなんですか」  
「牡馬は牝馬が心配だろう。あんたも同じじゃないのか。種馬は牝馬を見張っていて、牝馬がゲルの近くに帰ってくると一緒についてくる」  
「私はすでに種馬の時期は過ぎて、去勢馬に近い身分なので、最近は牝馬の動きはまったく気になりませんよ」  
ナランツェツェグはわたしと旦那の会話を乳を搾りながら笑みを浮かべて聞いている。一頭から搾れる乳



羊をなべで煮込む

は牛乳瓶一本分くらいだろうか。二〜三分するとお母さん馬を放してやり、別な仔馬をその母親のところに連れて行く。

毛並みが母と仔でかなり違っているのも見られたが、何十頭という羊の母仔のペアをしっかりと把握している遊牧民が、たかが数頭の馬の母仔を間違えるわけがない。

二頭の乳絞りで得られた乳はバケツの底に三センチほどである。搾った乳はすべて馬乳酒(アイラグ)にするのだという。ナランツェツェグは

バケツを提げてゲルに戻ると、布で毛などのゴミを手早く濾し、寸胴鍋のような背の高い容器に乳を流し込んだ。容器には既に発酵している馬乳酒が入っており、毎日継ぎ足してゆくのだそう。容器に残っている乳酸菌を発酵のスターターとして利用するのである。

私は今回の旅で毎日のように馬乳酒をご馳走になった。遊牧民のゲルを訪ねると必ずといっていいほど、どんぶりになみなみと注いだ馬乳酒が出てくる。最初は腹の具合が悪くなつては困ると少々遠慮気味だったが、吞んでみるとうまい。

味は酸味がすこし強く甘みがすくないカルピスと思えば良い。酒飲みの私はカルピスを取るか馬乳酒を取るかといわれたら間違いなく後者を取る。しかしアルコール度は

低く二〜三パーセントしかないのので、酔う前に腹が一杯になってしまうのが難点だ。

初恋の味カルピスは創業者の三島海雲が日露戦争当時、モンゴルで



飲んだ馬乳酒を基にして試行錯誤の末に開発したものである(カルピス誕生の裏話・カルピス(株))。長旅で弱った胃腸がたちまち回復したところから、日本に帰って同じような乳製品の開発を試みたというのだから、腹具合の心配などもともと無用なのである。

うまいうまいと言いながら、どっぷりを飲み干すと、食事の仕度をしていたムンフツエグがまたまたなみなみと継ぎ足してくれた。これももてなしの礼儀だという。馬乳酒を飲ましてもらったら、容器をかき回して行くのが客の礼儀だと聞いたので、摺りこぎを長くしたような棒で、鍋の中を十分ほど攪拌してやった。

「昔は牛の皮や胃でできたフフルという袋を使っていたんですが、今

はたいていステンレス容器やポリタンクを使っていますね」

ムンフツエグはうどんをいためる手は休めずに顔だけ私のほうに向けて馬乳酒の解説をしてくれる。私が今まで飲んだ中で一番うまいと褒めたのがうれしかったようだ。

「馬乳酒を作るのは夏の間だけでしよう。発酵させるための乳酸菌は、冬の間どうやって保存しておくんですか」

「うちのゲルにはもう良い菌がたくさん住み着いているから心配ないよ。次の夏になれば自然と同じ味の馬乳酒ができるのよ。どうしてもダメなときは町でも菌を売っているわよ」

「飲み頃はいつ頃ですかね」

「毎日毎日継ぎ足しているからいつでもおいしいわよ。よくかき混ぜる





のは発酵が均一になるためにするのよ。それと馬の乳は出産後二ヶ月ぐらいの今が一番うまいのよ」

馬乳酒はマルコ・ポーロの記録やチンギス・ハーンの伝説にすでに登場する。古代より同様のものがスキタイなどユーラシア大陸の遊牧民の間で飲まれてきた。馬乳酒は牛乳に比べ、ビタミンや不飽和脂肪酸が多く含まれ、酒というより栄養ドリンクである。遊牧民たちは仕事上の昼食などは、馬乳酒を飲

むだけで済ませてしまうという。ムンフツエツエグの焼きうどんがで上がったのは、注文してから二時間以上たってからだだった。火を熾し、うどんを捏ねるところから始めたのだから仕方ない。

味はうまかった。彼女は私の皿にだけ、長細い脂身の肉を乗せてくれた。羊の尻尾だという。口に入れると、かすかな塩味とともにほろほろと崩れ、羊の香りが広がった。エギーによれば、脂身は良いお客に



しか出さないという。しかも羊の尻尾は最高の脂身だという。

食後には馬乳酒を蒸留したアルヒという透明な酒を勧められたが、



これは丁重に辞退した。アルヒは日本の焼酎と同じでアルコール度が高いのだが、口当たりがよいため酒飲みの私はいつい飲みすぎてしまう。

かわりに羊の乳茶を「こちそう」になり、特製チーズをお土産にもらい、「エーデルワイス」と「ひまわり」という名前を持つ姉妹に笑顔で見送られて、バートリン一家のゲルを後にしたのであった。

## 世界遺産・オルホン溪谷

オルホン川は雨の少ないモンゴルでは一番長い川であり、流域面積も広い。ハンガイ山脈東南麓に発した流れは、東北に向かい、ウランバートルの東から流れてきたトール川を併せてセレンガ川に合流する。セ

レンゲ川はロシアに到りバイカル湖に流れ込み、エニセイ川となって北氷洋に注いでいる。

野を越え山を越え、たどり着いたオルホン川上流のウラーン・ツタガン滝はハンガイ山中の広い谷にある。横幅五メートル、落差は



オルホン川で水浴する牛の群れ

二十五メートル程度の滝で、日本では滝百選に選ばれるかどうかも怪しい。しかし乾燥の地に生きる遊牧民にとって、水しぶきをあげて豪快に落下する滝はあこがれの場所であろう。ナーダムの休暇を利用してたくさん地元を訪問客があり、泊めてくれるゲルを探すのに一苦労だった。

私にとって滝よりも、水と緑に恵まれた溪谷が何よりも心を和ませてくれた。ゴビ沙漠を旅して来た私のカラダは、からからに乾いているような気がしていた。ここに來てカラダが水気を取り戻したように感じたのは、大量に飲んだビールのせいばかりではあるまい。

ストーブの火が恋しくなるほど冷涼な大気、澄みきった青空、家畜たちが群れをなして草を食む緑の

じゅうたん、清冽な流れの小川のそばに咲き乱れる草花。

こここそがまさに私のイメージの中にあつたモンゴルそのものであつた。世界中にこんな美しい場所はもういくつも残っていない。かつてアジア



ウラン・ツタガラン滝付近でエンジンストップ

大陸から東ヨーロッパ一円を覆つていた大草原は、多くの地域が農地化されたり、荒地となつてしまつたりで、昔日の面影はない。

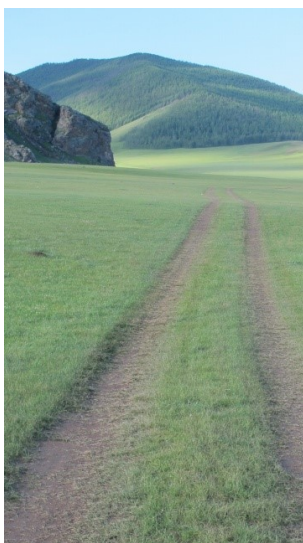
乾燥と冬の寒さから農耕が難しいモンゴル高原で、遊牧という生き方が生まれて数千年の歴史が流れた。オルホン碑文の「甘い言葉や柔らかな絹に惑わされず、この地で遊牧を続けよ」という遺言通りの生き方を守り続ける遊牧民はまだ健在だ。

その生き方も夏を彩る緑の草があつてこそである。遊牧民たちは五畜それぞれの本生を知り尽くし、それを巧みに利用することによって初めて遊牧という生き方を成り立たせている。

ゆったりとした時間の中でのんびり家畜を追っているように見える遊

牧民が、放牧や搾乳や乳の利用などにみられるきわめて高度な技術を駆使していることが、今回の旅で良く分かつた。それは長い歴史を通じて親から子へと受け継がれてきた技術の集積である。

もう一つ印象に残つたのは、遊牧民たちのもてなしの心である。彼らは突然訪れた異邦人を、すぐさまゲルの中に招き入れ、羊乳茶や馬乳酒で接待してくれた。出されたものを飲まないのはかえって失礼にあたるのだと言われ、馬乳酒のどんびりを何杯飲みほしたことだ





ろう。突然見知らぬ外国人が訪れた時、家の中まで上げてお茶を出す家庭が日本でどれだけあるだろうか。

寡黙で一見するととっつきにくい印象の遊牧民たちなのだが、胸襟を開いて話をするときわめて気さくであることにすぐ気付く。通訳を通じての会話だったため、もどかしい思いもしたが、異邦人のぶしつけな質問にも快く答えてくれた。

農耕民は灌漑や収穫といった共同作業がどうしても必要になるため、協調性が美德とされ、和の精神が尊ばれる。これに対し遊牧民は、広い牧地を独占的に利用しなければならず、他と孤立して生きるため攻撃的で協調性に乏しい、などといった文化論がいかに薄っぺらなものであるか、すぐ気付くだろう。

考古学では牧畜は農耕とほぼ同時に始まったか、農耕から派生したという説が現在では有力である。紀元前六千七百年ごろの遺跡であるイラクのジャルモ遺跡からはコムギやマメなどと一緒に、ヒツジ、ヤギ、ブタ、イヌなどの骨も発掘されている（農耕起源の人類史・ピーター・ベルウッド）。

農業がないところに文明はない、文明は農業とともに始まったと言われる。しかし農耕ができない場所に文明は育たないのだろうか。

ここで人類は遊牧という技術を発明する。紀元前八世紀ころにはペロドトスによって西のスキタイが歴史の中に登場し、紀元前三世紀には司馬遷によって東の匈奴が歴史の中に登場する。彼らは遊牧という技術を持って文明の扉をたたいたの



モラーンというオスの11歳馬。気立がよく乗りやすかった

である。

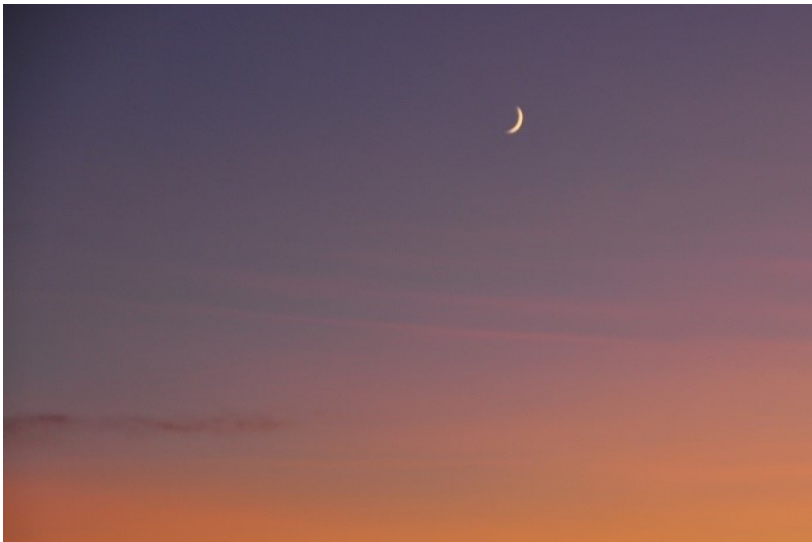
それから四千年、今や遊牧という文化は世界中で徐々に衰退の道

を歩んでいるように見える。国民国家という近代のイデオロギーの登場は国境という境界線を生み出し、国家は国民の支配を徹底するため定住化と農耕への転換を推進した。

ほとんどの近代国家は、遊牧は遅れた生産形態であり野蛮な生き方だと見なした。さらには遊牧民を「まつろわぬ民」と見なして徹底的に弾圧した。遊牧民は義務教育、徴税、徴兵などの近代国家のシステムにじっくりなじまないのだ。旧ソ連邦やトルコでは遊牧民は「絶滅」したと言われる。チベットでは十万人にも上る遊牧民が、中国政府によっていま強制的に都市に移住させられているという。

私はアフリカや中近東の遊牧もつづきに見てきた。ヨルダンの沙漠

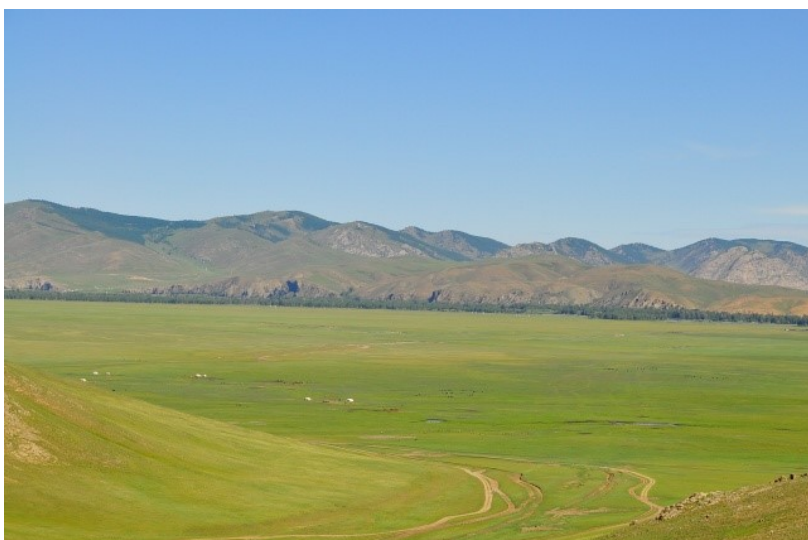
ではベドウィンのテントに泊まりこみ羊の世話をしたし、ナミビアの平原では牛を狙うジャッカルをヒンバ族の若者と追ひ払う役も引き受けた。一月に訪れたばかりのエチオピア



アのダナキル砂漠では、干ばつの影響で羊はやせ細っていた。

モンゴルはこれらの地域から見れば遊牧の条件に格段に恵まれている。遊牧という生産形態が地球上で生き延びる場所はもはやモンゴルしかないかもしれない。

私たちはすでに過剰なモノに囲まれていても、なお脅迫的に豊さを追い求めて悪戦苦闘してきた。「発展」は疑いなく善であり、「停滞」は悪であった。しかしそろそろ立ち止まって来し方行く末をじっくり考えてもいい時期であろう。福島の子力発電所の事故はそれを暗示している。安定した豊かな電力は、優れた工業製品造りの基盤になり、季節を忘れた快適さを保証し、夜から闇を追放した。しかし事故による放射能汚染によっ



て逃げまどう人の姿は、ひたすらに富を、快適さを追求する生き方に警鐘を鳴らしていないだろうか。遊牧民の暮らしは簡素である。移動するためには身軽でなければ

ならない。もとより富の蓄積を求めない。さらに、自然と上手に折り合いをつけながら、自然を最大限利用している遊牧という生き方は、エコロジーという考え方になっっている。遊牧民は自然を傷つけない。

滅びゆく遊牧文化を前にして、いまこそ私たちはその生き方から学ぶべきなのではないだろうか。

二十一世紀の文化はモンゴルにも確かな足取りで押し寄せてきている。太陽光発電やテレビの普及については前に述べた。ガイドの所持していた携帯電話は旅行中ほとんどの場所で利用可能であった。舗装道路建設も各所で始まっている。

遊牧民が携帯電話を使ってカシミアや羊肉の相場を確認し、高速道路を使って首都や外国にそれを販売する、そんな時代が来てもいい

ではないか。二十一世紀の遊牧を自信を持って展開してほしい。

私が訪れたのは、親と離れて遠くの学校で学んでいる子供たちが夏休みで、父母のゲルに帰ってきている時期だった。きちんとした教育を身に付けた遊牧民の子供たちが、遊牧民として生きること誇りをもち、モンゴルの未来を担ってくれることを期待して筆を置く。

fujizakura